

『高齢者の「こころ」事典』

日本老年行動科学会監修・荒木乳根子／他編

やまざき
山崎 さゆり

本書を手にしてまず思ったのは、「これは使える！」である。

高齢者の心に関わる問題について、心理、社会、医学、看護、介護、リハビリテーション、運動・スポーツ、学習・教育、心身障害、社会福祉、法律などの多様な領域から取り上げ、今日までに得られた新しい研究結果や議論が豊富に盛り込まれながらの解説が、分かり易くコンパクトにまとめられている。

具体的には、それらの多種領域に含まれる項目、計 156 項目のそれぞれについて、見開き 2 ページに図表と共に収載・解説される。また、これらの 156 項目はさらに、14 の領域（「心の加齢」「知的能力」「性・セクシュアリティ」「生きがい」「死」「心の測定」「心の病」「痴呆」「心のケア 1－心の理解とその対応」「心のケア 2－心理療法」「生活行動」「健康とスポーツ」「家族」「社会の中の高齢者」）に分けられ、各分野の冒頭には総論として当該領域に関する基礎知識が概説されている。

本書の「序」にも書かれているように、公的介護保険制度の下では身体的ケアが中心となっているが、現実の高齢者ケアにおいては、精神的ケア・心のケアの如何がケアの質を大きく左右する。実際に高齢者ケアに携わる人々が、「こういう時、具体的に何をどうしたら良いのか」などと迷い立ち止まった時に頁をめくってみるハンドブックとして、大いに活用され得るのではないかと思われる。また、高齢者ケアに直接関わる人々のみならず、高齢者の心理や行動、高齢者を取り巻く人的・物的環境を理解しようとする全ての人々が、様々な側面からの捉え方・考え方を知り、新たな自らの視点を切り拓き開発する上でも貴重なヒントの数々を与えてくれる書だと思う。

本書を監修した日本老年行動科学会は、「高齢者ケアの実践現場と行動科学研究の場をつなぐ『ケアと研究の出会いの場』を目指した学会」ということだが、まさにその双方が

相互理解し合える掛け橋となる書であると言えよう。

この書評を書くために手に取った私もまた、数ページめくって読み進めるうちに、本書の貴重さが実感させられた。例えば、「スープのさめない距離」の項目では、まず、『高齢者の家族形態』としてその実態と意識調査の概略が説明された後に、この言葉の由来について説明する。つまり、欧米では「高齢者が子どもとの同居を望まず、親子関係においても隔絶を求めるという見解から出発して‘intimacy at a distance’という概念に至ったのに対し、日本においては、高齢者は子どもと同居するものである規範から出発して」（同書 362～363頁）この語が使われるようになったのであり、この‘intimacy at a distance’が支持される観点が異なる、というのだ。また、『スープのさめない距離』が具体的にどのくらいの距離なのか、が男性より女性において世代差が大きいことを示した上で、その解釈と今後の課題についてまで言及しているのである。

このように、とりあえず興味をもった分野の基礎知識・概略を押さえることが出来る、いわば「窓口」として役立つ書であると同時に、豊富な参考文献や今後の課題が明示されている本書は、その窓口からさらに先に進む道筋を照らしてくれている。今日、学際的・総合的な研究視野を持って高齢者問題に取り組むことが望まれる研究者にとって、是非とも手元に置きたい一冊であると確信する。現に、本書のあちこちを“ツマミ食い”しているだけでも、自身が快く刺激されているのが実感できるのである。また、巻末の「索引」が約90語×23頁と、非常に充実しているのもうれしい。

何だかどこかの回し者(?)のような書評となってしまったが、実際、内容が充実していながら読みやすく、ぜひ頻繁に利用したいと思える一冊であるのは確かである。私もまた、研究室用にもう一冊、追加購入しようかどうかと真剣に考えている今日この頃である。

「高齢者の『こころ』事典」中央法規 2000年3月
日本老年行動科学会監修・荒木乳根子（調布学園短期大学教授）他編
A5版 433頁、4,000円（税別）